

外科通論

二



佐藤進講義  
門人筆記

# 外科通論

明治九年四月  
十五日板權免許

佐藤尚中藏版



外科通論卷之二

佐藤進講義

門人 筆記

第四章

○直接癒合ノ顯微鏡檢査○創縁血管擴張○血積ノ各異論說

此書ハ他ノ外科書ノ如ク別ニ章ヲ分チテ血積及ヒ炎ヲ掲説セス總テ外傷ニ由テ起ル所ノ局處ハ症狀ハ即チ血積及ヒ炎ナリ或ハ炎ニ由テ續發スル症狀ナリ故ニ此章外傷後起



ル所ノ諸外症又之ニ由テ創中ニ見ハル、諸般ノ變狀ヲ顯微鏡ノ檢査ニ據テ精シク總説スルモノナレハ讀者請フ意ヲ止メヨ前章論セシハ治療間肉眼ヲ以テ傷創ニ發見スル諸症ヲ揭説セシモノナリ故ニ傷後ヨリ癒後癍痕ヲ造クル時間ニ組織中ニ見ハル、細微ノ變化ヲ論セントス學者既ニ傷後創中如何ノ機ヲ發生ノ癒合ノ機ヲ營ムヤヲ小獸ニ由テ試驗シ少シク癒合ノ作用ヲ窺フコトヲ得タリ現今顯微鏡ノ檢査更ニ精巧ヲ極ムルニ及ニテ傷後創



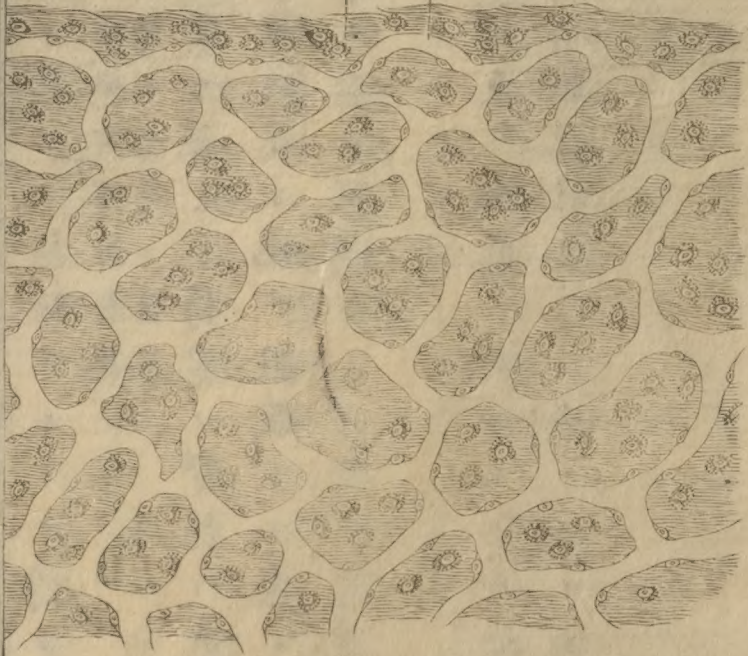
中ニ顯ハル、變化ヲ精レク檢知スルヲ得タ  
リ<sup>リ</sup>次ニ論スル所ハ維納府外科教授  
ビルロト氏發見スル所ニ係ル  
諸種ノ組織中傷後最モ著シク局處ノ變動ヲ起  
發スルモノハ脉管神經及ヒ他ノ組織トス然レ  
凡神經ノ作用ハ未タ全ク詳明ナラス故ニ其機  
用ヲ冗言セス  
先ツ單易ノ健組織ヲ取テ概見ニ供セントス即  
チ皮膚ノ結組織ニ毛細管密結レテ網ノ如キ略  
圖ヲ次ニ示ス  
圖第一

第一圖

健皮膚ノ結組織ト毛細管  
ヲ顯微鏡ニテ検査セシ略圖  
其大サ真物ニ比スレハ凡ソ  
四百倍ナリ

巨結組織房

毛細管







第二圖ハ第一圖ノ結組織ヲ上ヨリ下ニ切割セ  
シモノナリ毛細管ノ出血全ク止ミ而シテ術ヲ  
以テ創縁ヲ密ニ連着セシモノナリ此ニ疑問ヲ  
設ケテ創中如何ノ機ヲ發動スルヤヲ次ニ講究  
セシトス

圖ノ如ク傷後ハ直チニ創縁ノ毛細管中ニ血液  
凝固ス而シテ其凝血ハ傍枝ト口ヲ接スル所ニ達  
シテ止ム而シテ凝血ハ必ス創縁ノ中間ニ滯留ス

此ノ如ク一旦凝血脉管ヲ閉塞スルキハ血液路  
ヲ他ノ傍枝ニ取ラサルヲ得ス然ルキハ自然脉  
管中ニ血液ノ壓力亢進ス若シ血管傍枝ニ乏シ  
キキハ益々血液ノ流通ヲ礙碍ス此ノ如ク頓カ  
ニ血行礙塞ノ創縁ニ血液ノ壓力増進スルキハ  
毛細管從テ廣張ス是レ創ノ周圍ニ紅腫ノ二症  
ヲ見ハス所以ナリ又局處ノ腫張ヲ生スルニ他  
ノ原因アリ若シ血液ノ壓迫亢進スルニ由テ管  
壁愈菲薄トナルキハ血脉管外へ滲出スルヲ  
亦從テ增多シ傷所ノ組織中ニ滲入ス是レ即チ



腫張ヲ發スル所以ナリ又傷所ニ溫度亢進スルハ血液路ヲ傍枝ニ假リテ頓カニ脉管ニ聚集スルニ由ナリ右ノ諸症ハ眼ヲ以テ之ヲ檢知スルヲ得ヘシ其他傷所ニ生スル疼痛ハ脉管ノ擴張ト血水組織中ニ滲入ノ組織腫大トナルニ由テ傷所ノ神經枝ヲ壓迫スルニ由ルナリ

按スルニ右ニ論スル紅腫熱痛ノ四症ヲ兼發スルモノヲ炎ト名ツク其他炎ニ罹ルトキハ其組織ノ機能ヲ障害ス例之ハ筋肉神經炎ニ罹ルトキハ其機用ヲ失フカ如シ故ニ器械ノ



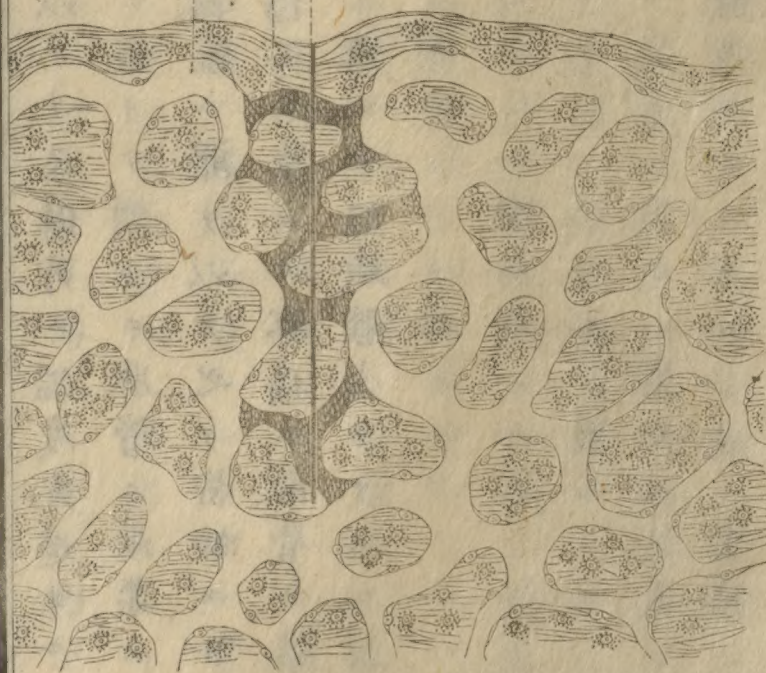
第二圖

第一圖ノ結組織ヲ切割  
セシモノ即チ毛细管ノ  
擴張ヲ示ス

①切割線

②凝血脉管ヲ閉塞ス

③毛细管擴張





機能障礙ヲ以テ炎ニ必見スル第五症トシテ  
右ニ論スル諸症ハ單易ニ之ヲ器械的ノ作用ニ  
歸スヘシ然レモ其源之ヲ外傷及ヒ器械的ノ作  
用ニ取ラサル諸般ノ炎症ヲモ亦之ヲ同一ノ作  
用ニ歸シテ論說スルヲ能ハス即チ傷後時トシ  
別ノ範圍ヨリ遠ク侵淫スル紅腫或ハ諸般ノ病  
發炎ニ由テ尿管始ヨリ著シク擴張スル等ハ他  
ノ源因ニ原ツクモノニシテ之ヲ盡ク器械的ノ作



用ニ歸スヘカラス

右ノ如ク器械的ノ作用ニ由ラスノ使フ所ニ由テ起ル脉管ノ廣張ハ何ソヤ所謂刺激ハ原ソクナリ其狀態ハ容易ニ之ヲ目撃シ得ハシト雖モ其理ヲ精シク了解スルハ大ニ難シトモ魚思討論スル所ニシテ其學說モ亦ニ一例ヲ掲ケテ其顯狀ヲ示シ今更ニ其眼瞼ヲ反離シ視ルニ平常其色灰白ナリガレテコトモ眼ヲ摩擦シ淚下ルニ至トキ復シテ眼瞼ヲ視ルトキハ其色變ノ紅色トナリ



脉管非常ニ血液ヲ充實ノ廣張スルヲ曰フヘ  
シ若シ五六「ミ」ニ「ト」ヲ經テ復タヒ視ルヤハ前  
症盡ク消散スルヲ見ルヘシ是レ即チ刺戟ニ由  
テ一時脉管廣張シ刺戟頓カニ去ルニ由リ脈管  
其舊ニ復セシナリ此ニ二ノ疑問アリ此刺戟ハ  
直接原因ハ何物ナルヤ又何故ニ其治メ難キヤ  
縮セスノ廣張スルヤ此疑問ハ答メルハ人々之  
易ナラストス只經驗ニ由テ苟モ其原由ヲ察ス  
ルキハ古人言ヘルカ如ク一言以テ之ヲ盡ス  
刺戟有ル所ニハ血液灌入スト之レ只利便ニ由

テ其部ニ血液ヲ非常ニ輻湊スルヲ  
答ノルノミ

晚今此ノ如キ原因ニ原イテ起ル血液  
實性血積<sup>ア</sup><sub>一</sub>ビラミ<sup>フ</sup>ト名ツクヒル<sup>レ</sup>別  
ニ名ヲ命ソ血液灌入ト云フ

血積ノ學說ハ古來醫家ノ討論スル所ニ  
ノ最モ主要タルモノナリ而シテ血積ハ  
繫スルモノニシテ炎ハ心ス血積ニ繼發  
即チ炎ニ先行ス次ニ晚今微境ニ起ル  
發見ニタル刺衝ヨリ起ル



廣張ノ曉說ヲ約說セントス

「ロツセ」及ヒ「レツ」兩氏ノ學說ニ據レハ尿管刺衝ヲ  
受ルキハ収縮セスノ直ニ廣張ス之ヲ主宰スル  
モノハ動尿管神經<sup>ソモト、セト、ル、ン</sup>脈壁ニ分布スナリトス然リ  
ト雖氏動物肝中直チニ尿管ヲレテ廣張セシム  
ル作用ヲ存スル筋肉アリヤ否未ク疑問ナキノ  
得ス「ベン」氏ノ說ニ據レハ尿管ノ廣張ハ刺衝  
ニ由テ起ル肝痺ニ原ノクナリト蓋シ尿管一旦  
刺衝ニ由テ収縮シ瞬間ノ後其力衰ヘテ森<sup>シ</sup>  
尿管廣張スルヤ否其微妙亦知ル可ラス

右一論說スル學說ハ晚近試驗ニ由テ蓋シテ  
所ノ說ト異トノ點令ノ試驗ニ據ルハ概ニ  
ノ蹼膜及腸間膜等ノ顯微鏡下ニ觀望スル  
舎密の及生理的ノ作用ニ由テ之ヲ判明スルハ  
其初メ微細ノ動脈靜脈及ヒ毛細管收縮ナルヲ  
觀ル但シ動靜細脈管ハ最初ニ收縮スル後毛細  
管收縮スルヲ始ム其收縮ノ時間ハ極メ短  
ク僅カ一「ピコント」ニ過サルヲアリ或ハ其時  
極短ニシテ測ル可カラサルヲアリ蓋シテ同  
用ニ原イテ收縮後直チニ脈管擴張スルヲ



鏡ノ試験ニ由テ看破レ得ヘキニ非ス

ビル<sup>リ</sup>シ<sup>ヨ</sup>」氏曾テ學説ヲ設ケテ曰ク血積ハ尿管  
中ノ血液ト其周圍ノ器械<sup>ツ</sup>パ<sup>レ</sup>ン<sup>ビ</sup>マノ間ニ  
起ル引クニ原ツクナリトセリ然レモ尿管ノ廣  
張ハ最初刺衝ニ由テ尿管痙攣的ニ收縮ニ然後  
速カニ麻痺ノ廣張スルト云説ヲ信用セリルニ  
アラス<sup>ハ</sup>晚今<sup>ゾ</sup>ボアレモ<sup>ニ</sup>氏<sup>ハ</sup>伯林大學生半面痛  
ヲノ交感神經ノ刺衝ニ由テ起ル尿管筋ノ痙攣  
的收縮ニ原ソクナリトセリ若レ頸部ノ交感神  
經刺衝ニ由テ一旦尿管ヲ收縮セシムルハ則

チ脈管ヲ麻痺ノニ、ヒ廣張セシメ即チ頭ノ充血  
症ヲ起スト云フ又佛醫「ベルナル」氏ハ頭部ニ  
在ル動脈ノ收縮ト廣張ハ頭部ノ皮層神經ノ作  
用ニ原ツクヲ發見セリ試ニ頸部ノ同神經第  
一結節ノ刺戟スルキハ則チ先ツ動脈收縮ノ苦  
シ同神經ヲ切斷スルキハ動脈及ヒ毛細管ノ廣  
張<sup>麻痺</sup>ヲ生スルモノトス

「ロッセ」氏ノ説ク所ハ右ニ論セル晚今ノ學說ニ異  
ナリト雖モ理ナキニ非ス例ヘハ人アリ恥ルキ  
ハ面色紅ヲ潮シ又驚愕スルキハ面色灰白トナ



ルハ蓋シ二種ノ神經ノ作用ナラン然ラハ則チ  
 軀中初ヨリ脉管ヲ収縮シ或ハ脉管ヲ擴張セシ  
 ムル二種ノ神經アルヒト看做サズルヲ得ナ  
 ヤ甲ハ交感神經乙ハ腦神經ノ作用ニ出ツルナ  
 ラン例之ハ迷走神經ヲ刺戟スルキハ心臟弛緩  
 シ又内臟神經ヲ刺戟スルキハ腸ノ蠕動息テ居  
 張スルカ如キ作用ヲ察スレハ「ロツセ氏」云ノカ  
 ク筋肉ノ實性擴張ヲ宰スル一種ノ神經ナキニ  
 非ス

按スルニ右ニ論スルカ如ク血積ノ論既述ク

浩幹ニシテ其論多クハ臆説ニ出ツ故ニ一モ以  
テ確據トシ血積ノ理ヲ明解スヘキ一定ノ論  
ナレ當今世ニ鼎立ノ末タ其是非ヲ分クトル  
學説ヲ三トナスヘシ即チ一ニ曰ク<sup>ハラワリセテオリ</sup>  
二ニ曰ク<sup>ハラワリセテオリ</sup>麻痺學説三ニ曰ク<sup>ハラワリセテオリ</sup>引<sup>ハラワリセテオリ</sup>力<sup>ハラワリセテオリ</sup>學<sup>ハラワリセテオリ</sup>説<sup>ハラワリセテオリ</sup>  
リ

右學者ノ論ハ盡ク臆説ニ出ツルト雖ハ確心  
焦思ノ由テ致ス所ニシテ血積ノ理ヲ究フ一足  
ルヘシ若シ其真理ヲ推究シ確説ノ起ルヲ見  
ルニハ今ヨリ星霜ヲ經人生ヲ換フルニアラ



サレハ豈能ク其妙理ヲ探リ得ヘケンヤ

## 第五章

○直接癒合ヲ營ム組織中ノ機法○災  
性産物○瘢痕形成○直接癒合ヲ妨  
クル原由

傷創發直ニ起ル脉管ノ擴張ト之ニ繼發スル血  
液流出等ハ之ヲ前章ニ論セリ然レ其相縫合  
ニ創縁如何ノ作用ニ由テ癒合スルヤノ未タ  
論議セズ抑創縁ノ癒合ハ創深更ニ重産物アリ  
テ兩縁ヲ相粘連スルヲ恰モ砒器ノ縫合ノ類ニ

テ連著維持スルカ如シ次ニ前章ニ揭示スル所  
ノ結組織ノ傷創ヲ復タヒ此ニ論説セントス  
告組織ノ細房ト其中間ニ存スル纖維様ノ物將  
ニ結合セラル其房一ハ長キ細尾ノ具ヘテ結  
ト連續シ且ツ核ヲ含蓄スル扁平狀ナリ所  
謂之ヲ結組織房ト云フ一ハ其性質白血球  
淋巴球ト一樣ナル房ニシテ恐クハ水腫腺中ニ  
造セラレ水尿管ヨリ血中ニ達シ機會ニ觸レテ  
炎ノ尿管ヨリ漏出ノ組織ノ形成ニ或ハ復タヒ  
尿管ニ入ルモノナラシメ所謂漏出房之レナリ

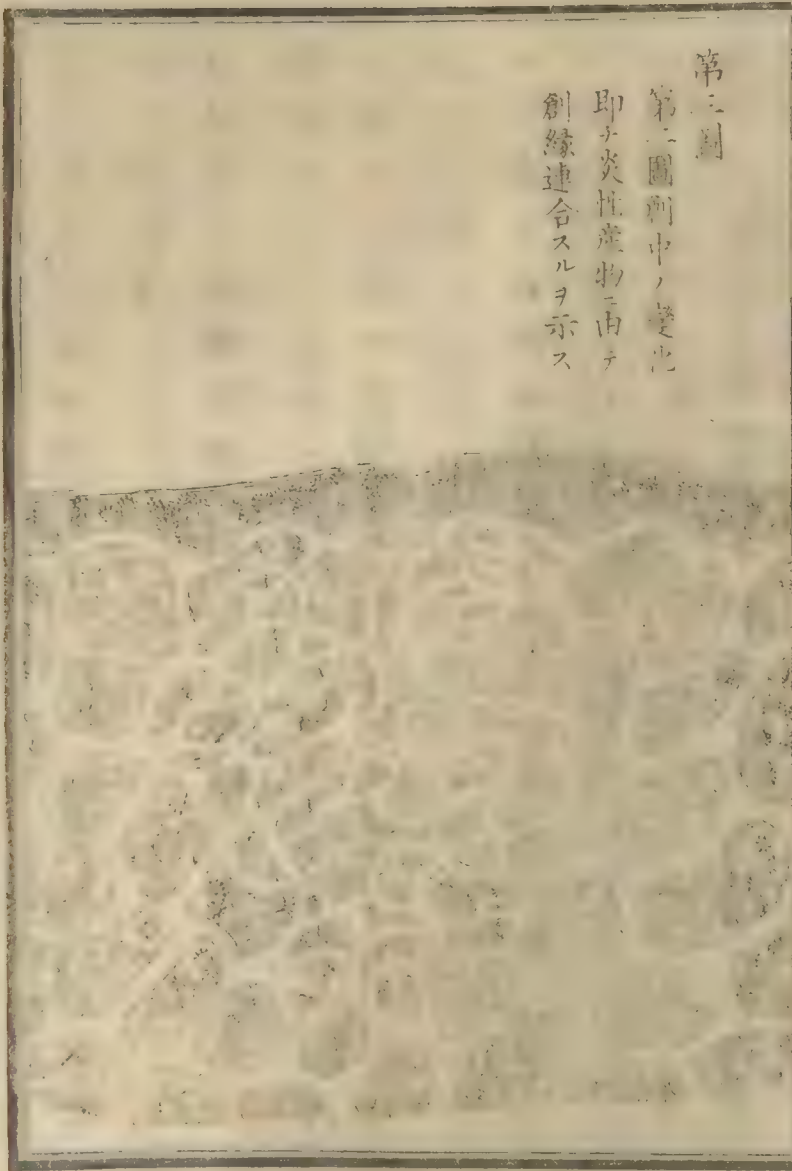


即チ晩今「レ」ケリ「ン」グスハウセ「ン」氏ノ發明ニ係  
ルモノナリ

又傷後六時間ヲ經テ創縁ノ組織ヲ顯微鏡ニテ  
檢査スリキハ全ク漏出房ニテ充實セラル其房  
一時ハ一時ヨリ增多シ創縁ノ組織中ニ透入ス  
而ソ一方ノ創縁ヨリ他ノ創縁ニ轉移ス細孔  
ニ存在スル組織様ノ物質ハ漸次ニ透明組織  
ナル粘膠質ニ變ス此ノ如キ變化ハ蓋シ房ノ作  
用ニ原クナラン細房漸々增多スルキハ房ノ中  
間ニ存スル粘膠質從テ減消シ而ソ遂ニハ創中

第三圖

第二圖刺中ノ變也  
即チ炎症産物ニ由テ  
創縁連合スルヲ示ス





盡ク細房ニテ充實スルヲ見ルニ至ル時ニ  
右ニ論スル創中ニ産出スル炎症性産物  
ルシヨ」氏ハ此ノ如ク炎ニ由テ産出スル細房組  
織ヲ「グラヌラチオニス」デウエーベ内臓ト名ケリ  
ンドフライシ氏ハ之ヲ「カイムデウエーベ」組織ト  
稱ス

「線」ノ間ニハ微ナル凝血ノ薄層ヲ遺殘ス  
ルモノナリ此ノ如キ凝血ハ時トノ違合ノ異ク  
ルヲアリ之レ蓋シ凝血ノ多キト其腐敗ノ速ク  
ト或ハ化膿スルトニ原クナリ又是れ敗壞ス

ル、コアリ成ハ瘰癧ヲ造ルコアリ

總テ刺入ニ由テ炎ヲ發スル處ハ創縁ニ見ルカ

如ク是れ組織ニモ漸々細房滲入スルモノナリ

時ハ炎ニ由テ產生スル細房何レノ處ヨリ來ル

ヤ明了ナラザリヤ然ルニ「コンハイ」氏「晩今」

常ノ發明ニ由テ此ノ如キ細房ノ脉管ヨリ漏出

スルコトヲ發見セリ實ニ晩今更ニ醫學ノ新面目

改メシハ同氏ノ偉効ト云ヘシ其試驗ヲ次ニ掲

ク同氏蝦蟇ヲ取テ其背ニ在ル脉管中ニ針ヲ

リンズルニ針ノ細管ヨリハ血液ヲ抽出スル



テ同蝦蟇ノ角膜ヲ刺衝セリ然ルニ其所ニ漸々  
アニリンブラーウィニ染ミテ漏出房ヲ發見セリ  
之ニ由テ刺衝セシ角膜ニ集マル細房ハ脉管ヨ  
リ組織中ニ漏出スル無色血球ニノ炎ニ由テ組  
織中ニ滲入スル細房ハ即チ無色血球ナルヲ  
看破セリ

按スルニ今ヲ去ル一七八年前即チゴンハイ  
ム氏未タ白血球ノ脉管ヨリ漏出スルヲ發  
見セサリニ時ハ炎ニ由テ生スル組織中ノ細  
房及ヒ諸般ノ病的產物即チ房ヨリ形成スル

モ ソノ多ク之ヲ結組織房ノ刺衝ニ由ル其  
數ヲ増シ一房分レテ二房ト成ルカ如ク愈々  
レテ愈々無數トナリ組織中ニ滲入スルモノト  
ナセリ是ヲ以テ往時ヒルシヨ<sub>リ</sub>氏等説ク所ニ  
據レハ嚙球ヲ其病ム所ノ組織ヨリ産出スル  
モノトナセリ故ニ白皮組織<sub>エビテ</sub>ル<sub>グエ</sub>ト<sub>アル</sub>コ  
リ産出スル嚙球ヲ内皮房ヨリ産出ス腺房  
及ヒ結組織ヨリ産出スルモノヲ結組織房ヨ  
リ産出スルモノトナセリ此ノ如ク細皮刺戟  
ヲ受クルハ愈々分レテ愈々其數ヲ増ス者ナル



ヲ發明セシハ英國ニテ「レ」ト「フルン」氏唱因ニ  
テ「ビルシヨ」氏ナリ甲ハ之ヲ軟骨ニ由テ發  
驗シ乙ハ之ヲ炎ヲ生セシ角膜ニ由テ發見セ  
リ其以前ハ房及ヒ組織ノ發生ヲ淋液或ハ  
凝固シタル血液及ヒ纖維質ヨリ直ニ結構セ  
フル、モノトナセリ嗚呼「ゴレ」ハ「イム」氏ノ發  
明一タビ世ニ出テシヨリ「ビルシヨ」氏等ノ  
亦既ニ固陋ニ屬ス況ヤ今日リ古ヲ顧  
ルトキハ古人ノ論說朦朧ニ似タリ是ヲ以テ  
之ヲ觀シハ我學ノ日ヲ追テ違ハハ

ラ史ニ證スヘキナリ

現今諸家ノ學說ニ據レハ炎ニ由テ組織中ニ滲  
入スル無數ノ新産房ハ盡ク脉管ヨリ漏出スル  
白血球ナルヲ信用ス然リト雖氏<sup>ワ</sup>ストリック<sup>ル</sup>  
氏及ヒ<sup>ワ</sup>レック<sup>ル</sup>リング<sup>ス</sup>ハウ<sup>セン</sup>氏等二三ノ逸者  
ハ全ク此說ニ服ス<sup>ル</sup>結組織房ヨリ産生<sup>ス</sup>ル  
古說ヲ守ル蓋シ炎ニ由テ軟骨其房ヲ分チテ愈  
増多スルハ固ヨリ白血球ニ關セサルヲ疑<sup>フ</sup>マ  
レス然リト雖氏<sup>ワ</sup>炎ニ由テ局處ニ漏出スル者ハ  
白血球十ノ八九ニ居ルトナスヘシ



此ニ二ノ疑問アリ何故ニ炎ニ罹ル組織中ニ無  
數ノ白血球漏出スルヤ又曰此ノ如キ無數ノ細  
房如何ノ作用ニ由テ血中ニ来ルヤ又何處ニ生  
生スルヤ抑白血球ノ脉管ヨリ漏出スル状態ヲ  
解クニ二説アリ一ニ曰白血球ハ毛細管ノ壁面  
ヲ構造スル各房間ヨリ漏出スルモノナリト二  
ニ曰毛細管ノ壁面ハ柔軟ナルプロトプラスマ  
ヨリ成ルモノナレハ白血球之ヲ透過シテ漏出ス  
ト又此ニ疑問アリ房ノ牀壁ヲ透過スル白血  
球自家ノ作用ニ歸スヘキヤ將タ血液透過スル

進ニ歸スヘキヤビ<sup>ル</sup>ロ<sup>ー</sup>ト氏ノ經驗ニ據<sup>ル</sup>ハ  
刺戟ニ由テ細脉管廣張スル<sup>ル</sup>ハ血液滞<sup>ル</sup>リテ  
且ツ血行慢徐トナル而<sup>シテ</sup>ノ滲出機常ヨリ増<sup>ス</sup>  
又脉壁柔軟菲薄トナリ且ツ脉管ノ裡面ニ久<sup>シ</sup>  
ク白血球集疊スル<sup>ル</sup>ハ容易ク脉管ヨリ漏<sup>ス</sup>  
故ニビ<sup>ル</sup>ロ<sup>ー</sup>ト氏ノ說ニ由<sup>ル</sup>レハ房ノ漏出ハ血  
行ノ慢徐ト脉壁柔薄ナルヲ以テ主原トナスヘ  
ルト云フ

白血球ヲ產生スル器ハ未タ全ク詳明ナラスト  
雖モ恐クハ水脉腺及ヒ脾臟ナルヘシ病<sup>ニ</sup>關<sup>ス</sup>

ミ經驗ニ由テ之ヲ察スルニ炎ニ罹ル道數ニ在  
ル水脉腺ハ必ス腫張スルヲ以テ證スルニ足ル  
蓋シ炎ニ由テ水脉腺中非常ニ白血球ヲ產生ス  
ルモノナラン

炎ニ由テ尿管廣張スルキハ只白血球ヲ漏出ス  
ルノミナラス時トシ赤血球ヲ漏出スルニシテ  
カラス即チ尿管中血液ノ壓力亢進スルニ因リ  
ルヲ知ルヘシ

右ニ論說セルハ炎ノ產物ナリ今此ニ右等ノ產  
物割中ニ如何ノ變化ヲ成シ又如何ノ作用ニ由



テ創縁ヲ相癒着セレムルヤヲ講究セーリス部  
傷後創中ニ産出スル細房ハ漸々創縁ヨリ  
創ノ近圍ニ蔓延ス而シテ創間ニ存在スル場出  
ハ漸々形ヲ變メ「スピンドル」狀トナリ房  
ノ粘膠質モ堅靱トナル即チ「スピンドル」房  
ノ結組織房トナリ新生ノ瘢痕組織ハ漸々建  
維様ナル通常ノ結組織ト仿シタルニ  
此ノ如ク白血球ノ結組織房ト變化シ如ク形  
成スルハ胎生ノ時ニ在テモ此作用ト一様  
モノナラン若シテ創縁直接癒合ニ由ルニ

ハ炎ノ產物即チ創縁ヲ互ニ連著スル物質モ韌  
強トナルコト亦速カナリ既ニ二十四時間ノ後ニ  
ハ連著物質ヲ變ノ纖維狀ヲ為スモノナリ創縁  
モ亦此ノ如キ物質ニ由テ滲入セラル第三日ニ  
至ルトキハ縫綴ノ助ケニ由ラスト雖ヒ創縁ヲ  
連繫スルモノナリ蓋シ連繫物ハ纖維質ナルヘ  
シ恐ラクハ滲出物及ヒ漏出セルモノハ其初ノ作  
用ニ由テ成ルモノナラン纖維質ハ其初ノ變  
ノ纖維様ノ結組織トナルナリ此ノ如ク炎ノ產  
物ニ由テ新タニ形成セラル、瘢痕ハ其初ノハ

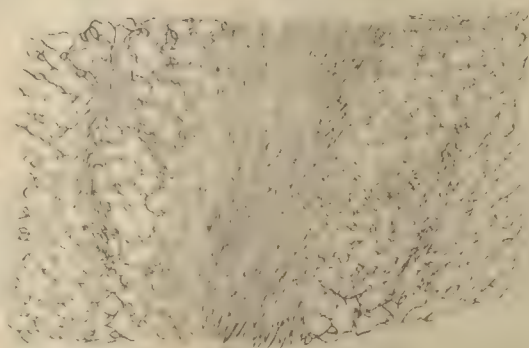
外科  
通論  
卷之六

癰疽  
疔瘡  
瘰癧  
流注  
乳癰  
乳岩  
痔瘡  
脫肛  
瘻管  
魚口  
便毒  
橫痃  
下疳  
梅毒  
淋病  
白濁  
遺精  
早洩  
陽痿  
不孕  
產後  
諸疾

第四圖

小獸ノ唇ノ切割ニ傷後第  
九日直接癒合ニ由テ治セシ  
癰痕ヲ顯微鏡ニテ検査セシモ  
ノ其大サ真物ニ比スレハ三百  
倍ナリ

① スピンデル房ヨリ  
形成スル癰痕





大半スピンドル房ヨリ成ル然レハ漸々其形ヲ  
變メ小トナリ或ハ全ク消滅ス然ルキハ房ヲ連  
續スル纖維様ノ物質最多トナルビレーツムス  
ピンドル房ヨリ滲出レーツハスピンドル房ヨ  
リ化成ヒレバロトプラスマヨリ成ルモノナラ  
シ即チ之ヨリ瘢痕組織ヲ造ルナリ  
傷後創縁ノ脉管如何ノ變化ヲ為スヤ  
片ハ則チ切断ヒラレシ脉管ヲ閉塞スルモノハ  
或ハ吸収ヒラレ或ハ他質ニ化成ス而シテ  
リ芽ノ如ク發長ヲ延出シ對側縁ニ接合スル

瘰癧ノ瘻口ニ通シテハニ血是ヲ交通セシム  
瘰癧ノ瘻口ノ通過ノ血行ノ田度スル  
創後ニ發セシ紅腫ノ症全ク消散スル  
管ニ富ムカ故ニ僅カニ細キ紅線  
ノミ又瘰癧中如何ノ變化ヲ成ス  
ハ先ッ新月スル瘰癧ノ一半ハ消滅ス之ハ瘰癧  
ノ萎小スルニ由ルナリ故ニ結核  
細條ヲ僅カニ見ルノミ又瘰癧ノ瘻口  
ハ漸々硬固トナリテ水合ニ成ス  
ルカ如ク扁平ナル結核ノニ變シ或ハ全ク消滅

ス恐クハ水脉管或ハ血管中ニ歸入スルヲラン  
此ノ如ク諸質漸々消散スルキハ瘢痕組織從テ  
萎縮シ遂ニハ其容サ細微トナリテ以前ニ半ハ  
ス

右ニ論スル所ハ炎機ニ由テ創縁直接癒合ヲ營  
ムモノナリ次ニ此直接癒合ヲ妨クル源由ナル  
モノヲ掲ケントス

〔イ〕縱令ニ創縁相縫綴セララル、モ組織ノ緊引甚  
シキハ則チ創口ヲ離開ス而シテ縫糸創縁ヲ切  
斷ス



(四) 創縁ニ多量ノ血液留滯スルキハ則チ一ツハ  
凝血異物トナリ一ツハ腐敗ニ陥リ創ノ癒合ヲ  
妨ク

(五) 挫傷ニ由テ生スル創ハ直接癒合ニ由テ治ス  
ルニ大ニ難シ如何トナレハ創縁整正ヲナスノ  
且ツ組織ノ一部挫滅セラレテ血管ヲ廢止シ或  
ハ組織ノ碎片死物トナリテ創中ニ留マールハ  
癒合ヲ妨クレハナリ故ニ豫メ傷創ノ狀態ヲ察  
シテ直接癒合ニ由テ治スベキヤ否ノ前知ス、  
シ

〔三〕砂石塵芥或ハアルカリ性ノ腐尿及ヒ大便等  
、不淨物創中ニ留マルキハ則チ器械的及ヒ含  
密的ノ作用ニ由テ創ノ癒合ヲ妨ク故ニ縫綴前  
密ニ検査ノ害物ヲ除去セスンハアラス

## 第六章

○失肉創ノ外變○間接癒合機ノ顯微

鏡検査○肉芽○膿○癰痕形成

此章論スル間創ノ癒合ハ前章ノ如ク直接癒合  
ニ由リ治セサルモノニ即チ創口縫綴ノ治一  
就ヒノヲ論説ス所謂間接癒合即チ第是ノリ創

縁連著ヒサル片ハ其狀態恰モ刃創ニ縫綴リ施  
サ、ルモノ、如ク或ハ局處ノ皮肉ノ一片ヲ割  
取スルモノ、如シ

若シ最初ヨリ此ノ如キ開創ヲ精シク檢スル片  
ハ二十四時間後創縁少シク紅腫シ之ノ露迫ス  
ル、疼痛ス其諸症縫合セシ傷創ニ發見スル  
カ如シ炎症モ縫合セシ創ニ發スルカ如ク一  
テ劇シキモノニアラス或ハ腫痛ノ症全ク無キ  
モノアリ創處ニ生スル諸症ノ輕重ハ其人ノ体  
質年齢等諸般ノ原因ニ由テ一樣ナラス二十四



時間後ハ創面只微シク異變ヲ見ハス即チ帶黃  
赤色ニシテ微シク粘膠質ノ如キ外見ヲ見ハス  
若シ袖珍顯微鏡ヲ以テ之ヲ精シク檢スルハ  
死壞ニ陥イル微細ナル組織ノ碎片創面ニ附著  
スルヲ見ル第二日ニ至ルハ則チ創面既ニ帶  
黃赤色ノ稀汁ヲ生シ而シテ創面ノ組織ハ一樣ニ  
帶黃赤色ニシテ粘膠ノ如キ外見ヲ發ス第三日ニ  
至ルハ創面ノ滲出物黃色ニシテ稠厚ナリ而シテ  
其黃汁中ニハ無數ノ組織碎片溶解シテ創面ヨ  
リ流出ス然ルハ創面漸々平坦トナリ一掃ニ

紅色ヲ帶ノ人之ヲ呼テ傷創掃清スト云若シ流  
出スル液汁ヲ小盃ニ取テ檢スルキハ帶黃赤色  
ナリ而シテ漸々帶黃褐色トナリ汚色ヲ帶ノ者  
第三日ニ至レハ絶ヘス液汁ヲ流泄ス其創面ヲ  
袖珍顯微鏡ヲ以テ照スルハ則チ黍粒大ノ赤キ  
顆粒狀創面ヨリ凸隆スルヲ見即チ之ヲ肉芽ト  
名ク其發生第四日ヨリ第六日ヲ極度トス而シ  
漸々顆粒狀混接シ境界ヲ見サルニ至ル然ルハハ  
創面次第ニ平坦トナリ僅ニ顆項ヲ創面ニ散見  
スルノミ之ヲ名ケテ肉芽面ト云此ノ如キ創面

ガラスプレートに貼ル

ヨリ流出スル液汁ハ稠厚ニシ其色正黄ナリ  
シ其質ハ乳脂膜ト一樣ナリ此ノ如キ流動物  
名ケテ膿ト云

即チ良膿ナリ

右ニ速フル所ノ諸症ハ通常ノ經過ナリ然レモ  
組織ヲ傷ツクル又ノ鋭鈍等ニ由テ其經過一樣  
ナラス又腱膜及骨等脉管ニ乏レキ組織ニ在  
テハ其經過大ニ慢徐ナリ其他患者ノ淋瀝ニ由  
テ大ニ差異アリ例ヘハ高老ノ人虚弱及老  
不良等ノ人ニテハ肉芽ノ發生甚慢徐ナル  
ノミナラス其色灰白ニシ且ツ弛緩ス



肉芽絶ヘス膿ヲ蟻出ノ其發生進ニテ止サル片  
ハ其面皮膚ノ表面ト高サヲ同フスルヲアリ或  
ハ皮膚面ヨリ凸出スルヲアリ然ルキハ顆粒腫  
全ク其形ヲ失亡ノ創ノ全面粘膠様ノ外見ヲ  
為ス若シ肉芽漸々皮上ニ隆起ノ止マス或ハ肉  
出ノ退却セサル片ハ則チ術ヲ以テ翳鉗ノ之  
ヲ制伏スヘシ

若シ肉芽ノ發生歇テ創口癒シトスルヤハ肉芽  
肉芽ハ次ノ變化ヲ成ス即チ肉芽ノ全面漸次ニ  
萎縮シテ小トナリ而シテ肉芽ト皮膚ノ間ニ隙

膿或少シ其端ニ乾樣レタル赤キ膜樣ノ細線ノ  
透リ其終漸々創面ノ中心ニ向テ進ム若シ全創  
面ヲ被覆スレバハ更ニ創縁ヨリ帶青白色ノ膜  
ヲ生シ次第ニ創面ヲ被フ前ノ如シ此ノ如キ  
線樣ノ二膜ハ即チ表皮ヨリ成ル而シテ全ク創面  
ヲ被フキハ則チ創面ニ癰痕ヲ造ルナリ新癰痕  
ハ其色赤々メ健皮膚ヨリ著シク分割ス而シテ  
ヲ按スレハ皮膚ヨリ硬キヲ覺フ而シテ直下ノ組  
織ト密著ス然レニ日ヲ累ネ月ヲ經ルニ從テ其  
色灰白其質ハ柔軟トナル又年ヲ經ルキハ漸々

縮ノ終身傷所ニ白痕ヲ残スモノナリ若レ痕  
痕収縮メ其萎小ト共ニ隣圍ノ皮膚ヲ牽攣スル  
キハ時トメ其部ニ醜態ヲ残スヲアリ例ハ顔  
創嚴痕ヲ造ルニ由テ下眼瞼ヲ下方ニ牽引シ  
瞼眼瞼外縁症ヲ發スルカ如シ

通常創面ヲ被フ所ノ表皮ハ右ニ説クカ如ク創  
ノ周圍ヨリ起ルト雖モ時トメ創ノ中央ニ孤立  
スル島ノ如キ局部ヨリ創ノ周圍ニ向テ進發ス  
ルアリ是レ怪ムヘキ異常ノ者ニアラス此  
所謂「マルビキ」氏叢

表皮ト真皮ノ間ニ  
在ル粘液層ヲ云フヲ存スル



皮膚ノ一皮創中ニ留殘メ其處ヨリ表皮ヲ生ス  
ルモノナリ例ヘハ火傷ニ於テ數々經驗スルヲ  
得ルカ如シ即チ湯火及ヒ強酸類皮膚ヲ灼損ス  
ルニ強弱アリテマルピキ氏叢及ヒ真皮ヲ全ク  
燒滅ヤサルキハ其部ヨリ表皮ヲ生スルナリ又  
此ニ一例ヲ舉クルニ皮膚ニ芫菁膏ヲ貼スルニ  
由テ生出物ヲ產出シ角層ハマルピキ氏叢ヨリ  
胞腫シ其水胞ヲ剥去スルキハ剝脱部ヨリ復タ  
ヒ表皮ヲ造出ス之マルピキ氏叢ヲ失ナワサル  
ニ由ルヲマルピキ氏叢ヲ全ク失ハスルキハ

必ス其時ヨリ表皮ヲ發生スルヲナシ然ル共ハ  
右ニ論説スルカ如ク表皮ハ漸々創ノ周圍ヨリ  
起リテ中心ニ向フ

按スルニ諸多ノ外科醫ハ創面ニ表皮ノ發生  
スル原ヲ只創縁ノ表皮ヨリ生スル者トヒス  
肉芽面ヨリモ亦發生スルモノナリトス故ニ  
表皮及ヒマルピキ氏叢ヲ存セサル創ノ肉芽  
面ヨリ表皮ノ生スルヲ信用ス然レトモ試  
験ニ由テ未タ之ヲ確定スルヲ能ハス現今ノ  
試験ニ據レハ肉芽ヨリ表皮ヲ發生スル理ナ

動物ノ組織ハ發生學ニ由テ之ヲ考フルニルテ  
動物ノ構造スル組織ハ胎生ノ初ヨリ之ヲ  
有ノ系統ヲ固持スルモノナリ例ハハ内皮  
ト結組織ハ之ヲ構造スル原ヲ異ニス故  
甲ヲ發生スルヲ能ハストス故ニ肉芽ヲ形成  
スルモノト表皮ヲ形成スル者トハ其組織  
ヨリ異ナリ其原ヲ異ニシ其末ヲ同ノル  
ハス故ニ病理ニ接レハ往時肉芽病  
タルアルヲノ或ハ結組織ヨリ發育スル



云説フ事ナリトスルカ如シ殊ニワルデー氏  
及ヒターリシ氏等ノ學者現今此説ヲ主張ス  
又一例ヲ舉レハ千八百七十年佛蘭西ニ於テ  
シ氏瘰癧ノ結バサル頸部ノ潰瘍ニ表皮ノ一  
片ヲ剪刀ニテ他所ヨリ割取レ瘍面ニ縫合  
ルニ由テ其所ヨリ表皮ヲ生シ潰瘍ヲ全ク被  
フテ治セシヲ發見セリ爾來諸多ノ學者試  
驗ニ由リ其奏効ヲ證スルヲ詳ニカラス即チ  
現今ノ新説理アルヲ證スルニ足ルヘシ余近  
頃順天堂ニ在ッテ諸瘰癧ノ瘡ヲ殊ニ頑固ニシ

後、皮ノ起リ盡キモノニ右ニ論スルカ如ク衣  
皮ノ細片ヲ健皮内ヨリ割取、瘡面ニ植接ス  
ルイヲ數試驗セリ、然レモ未ク全ク其功驗ヲ  
見ス、植接後二十四時間ヲ經テ之ヲ檢スルニ  
表皮ノ細片ニ變ノ灰白トナリ、瘡面ヘ固着  
スル者アリ、或ハ剥脱スル者アリ、其固着スル  
モノヲ試ニ鑷尖ニテ輕々擦スル片ハ悉く  
癒着スルノ覺ノ然レモ翌日ニ至ル片ハ  
コリ脱落ス、植接スルニ表皮ノ一片微着ニ過  
クル片ハ却テ癒着ノ力少ク、剥脱スルモノ

外科  
通論

外科  
通論

レ厚ク異一にノ割取ノ血ヲ見ルニ至ルハ  
常面ニ瘀著レ止マルヲ永レ此ヲ以テ之レノ  
觀レハ表皮菲薄ニ過キテマルビギ氏叢  
真皮ヲ共ニ割取セサルハ只癰瘡ヲ營  
十全ナラユルノミナラス表皮ヲ產生スル  
難カラニ故ニ此陋見ヲ以テ他日試験ヲ及  
セントス

右ニ論說セル所ハ只陽創後ノ外見症ナリ次ニ  
肉芽腫及ヒ瘢痕ノ發生ヲ精ニク顯微鏡ニテ檢  
査レ石ニ論スル外見症ノ因テ起ル所以ノ故ニ



ントス

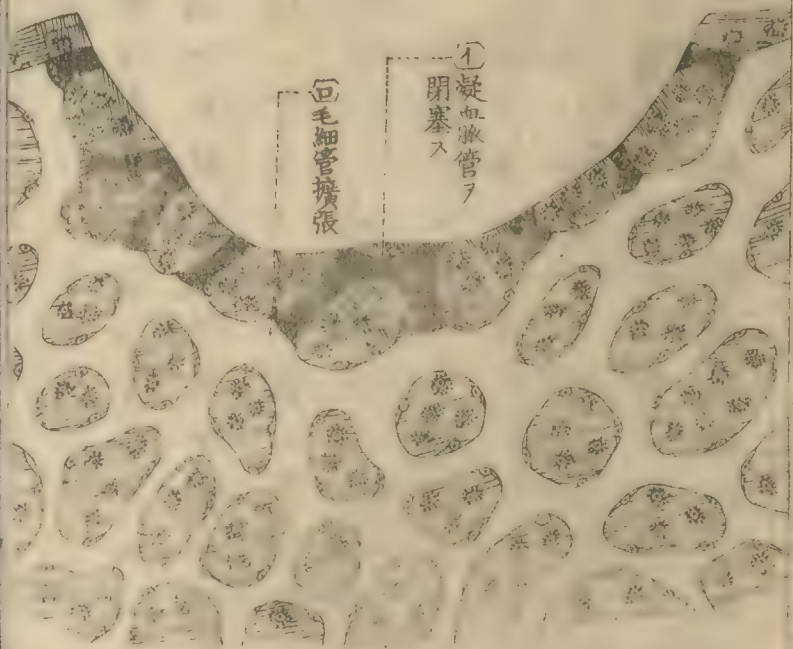
離開セル創ノ症狀ヲ精シク知ラントスルニハ  
復タヒ第一圖ニ出セル結組織ヲ取テ創中發見  
スル所ノ諸症ヲ論スルニアリ若シ假ニ半月様ニ  
結組織ノ一片ヲ割出セシ矢肉創ノ第五圖取テ  
創中如何ノ症狀ヲ起發スルヤヲ想像スルハ  
則テ最初ニ發スル症ヲ出血トス

若シ創縁ノ脉管ニ凝血栓塞シテ出血止ムトキ  
ハ創縁ノ血管從テ擴張シ繼イデ血水ヲ滲出ス  
ル等第五章ニ論スルカ如シ創傷後如何ノ症狀

知  
種  
近  
言  
種

第五圖

半月様失肉創略圖  
其大サ真物ニ比スレ  
ハ凡ッ四百倍



川  
天  
地  
人  
物  
事  
物  
片  
片

ヲ起發スルヤヲ檢スルハ則チ其邊に  
ニ創中ニ見スルカ如シ即チ白血球創面  
組織中ニ滲入ス即チ之ヲ形成的滲入或ハ炎性  
產物トモ云然レハ夾肉創ハ創縁スル創縁ナ  
ヲ以テ血管ヨリ滲出スル房ハ縫創ニ於ルカ  
クニニ結組織ニ化セスノ最初創面ニ滯止ス  
又滲出セラレシ纖維質ハ粘膠ノ如クニシテ  
柔軟ナリ又房ヲ以テ滲入セラレシ創面ノ組織  
モ其性質之ト一樣ナリ此ノ如ク軟ナリ粘質  
ハ細房ニ爲ミ且チ新タニ脈管ヲ造成ス

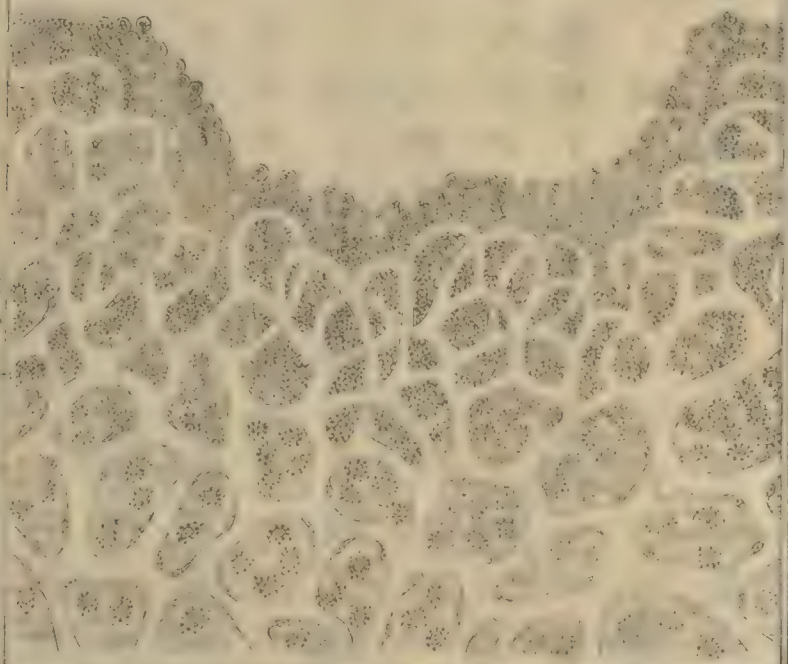


肉芽組織ニ生ズル

如キ組織ハ即チ細尿管ニ留ミシ炎症産物ナリ  
其組織ハ創底ヨリ漸々表面ニ向テ發達スルニ  
組織ハ自ラ層ヲ成シ毎層性質ノ異ニスト  
其質軟ニシテ流動性ニ直シ下層ハ之ニ入スル  
細房間ニ存スル物質ノ濃薄ニ異ナルナリ  
此ノ如キ最上ノ稀汁ハ絶ヘス創面ニリ  
去ルモノナリ更ニ肉芽組織ヨリ漏出スル細房  
ハ集聚シテ其缺亡スルヲ補フ此層ヲ營ムモノ  
ハ即チ膜ナリ

第三圖

大端則白ノ同茅組織ヲ  
示スルモノニ、其ノ中ニ成ル  
ル、爲野底ニシテ、如ク  
示スハ  
今、其ノ方ニ辨別  
シ、揚キヲ要スル爲ナリ



膿ハ血ノ凝ニシテ溶崩セシ炎性産物ナリ而シテ肉  
芽組織ニ他ノ血管多キ組織ヨリ産出スルモ  
トナリ膿ハ必ス火肉傷創ノ如ク只口ヲ外氣ニ  
通スル一面ノ組織部ヨリ産出スルノミニアラ  
ス若シ筋肉ノ深處ニ膿ヲ醸シ其處ニ空洞ヲ造  
ルトキハ之ヲ名ケテ膿腫<sup>アフゼス</sup>ト云

膿ヲ器ニ盛リテ静定スル片ハ分レテ二層トナ  
ル上層ハ稀薄ニシテ澄明ナリ下層ハ稠濃ニシテ黄  
色ヲ帶フ上層ハ多ク細房間物質ヨリ成リ下層  
ハ多ク膿球ヲ含ム若シ顯微鏡ニ由テ之ヲ檢ス



ルハ膿球ハ其形圓クノ其中ニ細胞ノ顆々  
ヲ見ル膿球ハ其大サ白血球ト同シ其中ニ核  
リ其數一ナラス三顆ヨリ四顆ニ至ルアリ而  
其色黯黒ナリ若シ酢酸ヲ加フルキハ其核殊ニ  
明著トナル如何トナレハ膿球ニ存スルフロト  
プラスマヨリ成レル細胞溶解セラレテ透明ト  
ナルニ由ナリ核ハ酢酸ニ由テ溶解セス  
晩今<sup>レ</sup>ツケリシクスハウセン氏ノ發見ニ要レ  
ハ膿球ノ形圓ナルハ死ノ生機ヲ存セサルモノ  
ナリ生ヲ存スルモノハ其形圓ノ如クニ其平

第七圖

暖氣ノ性質ニテ、ア、検査シ其真形ヲ知ル、且大ナル異物ニ比スレハ凡ソ四百倍ナリ

〔六生體球アメボイ〕  
運動ヲナシテ、健々

ノ形狀ヲ見ソスタ  
示ス

〔五死體球ニ酢酸〕

ノ性質ニシモノ

〔五死體球〕



ヲ變スル、一、諸般ナリ、  
謂「アメボイ」ノ運動ノ成  
スモノナリ、其性質ハ五  
温ニ過テハ運動ナリト  
雖モ温度之、  
ルキハ運動ヲ速クナリ、  
シ熱度減スルキハ之  
反ス  
暖ノ含蓄的検査ハ大ニ  
困難ナルモノトス如何

ナリ  
 難ク而シテ、血球ノ流動難ヨリ至ク別前  
 フ變スルモノニシテ其真性ヲ得ルヲ難ク  
 リ其他體中ニハ多クバロテ、眞ノ含ムニ由  
 之ヲ妙ニ察スルヨリ分離スルヲ大ニ難キニ  
 血中ニ鬱滯スル膿ハ容易ニ酸酵酵メ  
 ト雖モ若シ血中コリ一旦流出スルモハ膿  
 ルカ<sup>リ</sup>性ノ新膿ニシテ縱令ヒ之ヲ器ニ盛リ  
 覆フヲ貯フト雖モ速カニ酸性酸酵ヲ為スモノ  
 ナリ

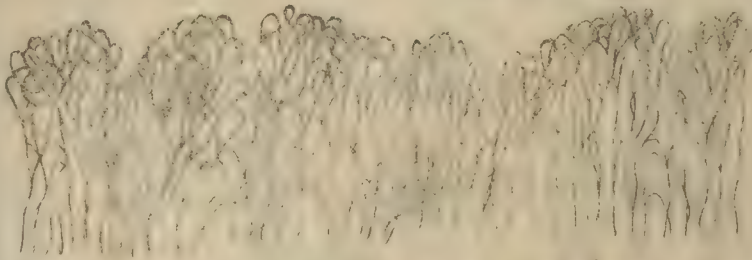


肉芽組織ノ生成分トナスベキ者ヲ述ベ  
ス肉芽ノ赤色ハ血管ニ富ムニ由リハ血管  
脈管係蹄ノ成ニ彎屈シ立ニ吻合ス  
四日ヨリ第五日ニ至ル迄ハ新タニ脈管ノ  
スルヲ直接癒合ニ放テ見ル力如シ此ニ由  
リ創面ニ生スル粒々タル肉芽ハ  
又何ヲ以テ創面ニ生スル粒々タル肉芽ハ  
ヤ蓋モ其原由ハ創面ニ生スル粒々タル肉芽ハ  
ラス或ハ云其形粒狀ヲナスハ真皮ニ由リ  
リ起生スルニ由リト然レモ筋肉及ニ骨

織ニヒ亦粒々タル肉芽ヲ發生スルヲ有ルヲ以  
テ見レハ真皮乳頭ニ關係セサルヲ知ル可シ故  
ニ肉芽ノ原ヲ説明スルニ足ラス夫レ創面ノ  
ヲ成ス原因ハ脉管彎屈係蹄ヲ成メ簇々片ヲ造  
リ創面ニ凸起スルニ由テ成ルヲ疑フヘシ  
然レモ如何ノ理ニ原イテ脉管簇々伍列ニ成ス  
ヤト云疑問ナカレ可カラズ總テ健ナル皮膚又  
ヒ脂肪組織ニハ脉管叢簇ヲ成ス者ナルヲ知  
スヘシ人ノ知ルカ如ク汗腺及脂腺毛根等ハ  
織ニハ毛細管群集網叢ヲ成スモノトシテ交

第八

肉質平軟管ノ群  
簇ヲ顯微鏡ニテ  
検査セシモ其大  
サ真物ニ比ヘレバ  
凡ソ四十倍ノリ



由テ其毛細管ハ血  
積スルキハ血管  
其部ニ顆粒ヲ見  
故ニ創面顆粒ノ  
タトノ最モ著シ  
皮及ヒ脂肪組織  
ヘシ筋肉ニ在テ  
管ノ群叢ヲ見  
ク或ハ之アル  
ルモノナレハ肉



生着レタノス此論說ノ是非ノ決セシトモ一  
ノハク肉芽ニ絡着スル細尿管ト一色ヲ混シ  
タニ流動物ヲ其幹枝ヨリ射注シ之ヲ證スルニ  
在リ第八回ヘシ

第八回ハ創面ニ未タ顆粒態ヲ現ハサスト雖  
肉芽組織ノ發生ト尿管ノ叢列ヲ示シ且ツ膿ト  
一ノ生産スル組織ノ關係ノ概見セシマルノミ  
肉芽面ヨリ絶ハス膿ノ滲出ノ創面コノ滲出  
去ルニ其處ニ物質ノ缺乏ノ見リタルハ肉芽面  
ヨリ絶ハス多量ノ膿球ヲ産出ノ之ヲ補フニ由

外科  
通論  
二

腫瘍

ル但レ膿液ハ直ニ肉芽組織ヨリ漏出スルハ至  
ニ尿管ヨリ漏出スルモノナリ故ニ肉芽組織ヨリ  
膿ヲ滲出スルハ粘膜炎及ヒ洩孔膜ニ至ル迄ト  
一樣ナルモノナリ殊ニ粘膜炎ノ滲出液亢進ト  
加答兒ト一樣ナリ故ニ健部ノ滲出ハ之ノ組織  
軟化<sup>ヒ</sup>化膿<sup>及</sup>ヨリ起ル膿滲出ト區別ヲ成ス大  
ニ困難ナリ

若レ肉芽ノ發育愈進ンテ止マサルハ皮膚ヨ  
リ凸起スルモノナリ或ハ皮膚ト平面ヲ成シ止  
マルモノアリ又傷創痕ヲ造リテ治セントスル

片ハ則チ直接癒合ニ由テ治スル創縁ニ於ケル  
力如ク肉芽面ト其組織中ニ存在スル無數ノ細  
房白血球消滅ス即チ崩溶ノ吸収セラル、ニ由ナ  
リ然レニ漏出房形ヲ存ノ復ヒ脉管中ニ歸入ス  
ルヤ否微シク疑團ナキヲ能ハス細房類敗セン  
トスル片ハ房中ニ細微ノ脂肪顆ヲ漸々發見ス  
此ノ如キ房ヲ名ケテ顆粒房ト云多ク肉芽中ニ  
存在ス

如此ク肉芽中ノ房漸々退滅スル片ハ房ノ漏出  
モ從テ歇ム然ル片ハ粘膠質ノ房間物質モ纖維



様ノ結組織ニ變化ス之レ水分ヲ血中ニ與ヘ又  
表面ヨリ水分ヲ蒸發スルニ由ルナリ而シテ帶殘  
スル細房ハ通常ノ結組織房ニ變化ス若シ創面  
ニ膿ノ滲出全ク歇ム片ハ創縁ノ肉芽ニ漸々表  
皮ヲ生ス最末ニハ肉芽中ノ脉管漸々萎縮シ他  
質ニ化シ殘留スル脉管ハ僅カニ癰痕ヲ給養ス  
ルノミ此ノ如ク脉管消滅スル片ハ癰痕愈硬固  
トナル

外科通論卷之二終

陸軍醫部  
海軍病院  
醫學校

官版御用所

拙舗累世書籍ヲ嚮キ近年醫書及ヒ翻譯書ヲ專  
ニス 都鄙一般醫學大家著述シ玉フ所アレバタ  
クハ拙舗ニ發兌ヲ命セラル故ニ海内新刺ノ醫  
書ハ必ス備エテ以テ漏スーナカラントス仰願  
クハ書ヲ求メ玉フノ諸君子高顧アラントヲ

書肆

東京馬喰町二丁目

英蘭堂 島村利助



